

・ 作品タイトル  
健全なる救済

・ 著者名  
小山 ラム子

・ あらすじ（140字以内）  
元友人達からの嫌がらせによって、クラスから浮いてしまっている私は、ある日地学室で本を読んでいる先輩と出会う。放課後、その先輩と二人きりで過ごすのが、私の学校へと通う唯一の理由になっていた。しばらくたち、その先輩が自分自身について語り始める。その境遇は私とそっくりだった。

・ 文字数  
4882字

少女が顔を上げ、窓のほうに顔を向ける。

窓から差し込む光は、夕暮れ時の淡いオレンジ色だ。

少女は立ち上がり、白いカーテンに手をかけ、一気に引いた。

その柔らかな橙を拒絶するかのように。

少女は席に着く。手元の本は、昨日からページが進んでいるようには見えなかった。

意を決してその少女に声をかけてから、私は彼女の元へと通うようになった。

特別棟三階の一番端。放課後の喧噪も届かない地学室に、彼女はいた。

「また来たの？」

教室のドアを開くと、彼女はゆっくりと顔を上げて私と目を合わせた。

「ここ、落ち着いて勉強できますから」

そう言っ、彼女が座る四人掛けのテーブル席とはちがうテーブル席へと腰掛ける。といても隣のテーブルなので、距離自体は近

めだ。

彼女がふっ、と微笑む気配がする。

上履きの色から、学年が一つ上の二年生だということとは分かるけれど、名前も知らない。

だけど、彼女と過ごす放課後のひと時が、今、私が学校に来る唯一の理由だった。

小学校、中学校と私は順調だったと思う。

勉強は、難しい問題に苦戦することはあっても、頭を抱えるほどではなく、成績を心配することもなかった。休み時間におしゃべりを楽しむ友達もいたし、イベントや行事はクラスメート達とそれなりに楽しんでいた。

失敗したのは高校生の今。

なんでもない会話を楽しんでいたはずの休み時間に、私は意味もなく廊下を歩き回っていた。

腕時計を見て、授業開始一分前になったことを確認し、そっと教室へと入る。

静かに入ったにも関わらず、こちらを向い

てくすりと笑う女子生徒達がいる。

高校入学後、一月ほど私が入っていたグループの子達。

気が合わないと判断した人間は、徹底的に排除しないと気が済まない子達。

先生達にはばれないように、だけど私が気にするように。

恐ろしいほどのバランスをもって、私に対して悪意を向ける。

「私、クラスの中で浮いてるの」

ある日、名も知らぬ先輩がそんなことを言った。本に目を落としながら、独り言のように呟いたその言葉は、さざ波のように私の中へと近づき、中心に届くころには大きな揺れとなっていた。

「いつの間にか、私と友達だと思っていた子達の間に隔たりができて、当たり前のように一人にされた」

先輩はそう言っ、少し口をつぐむ。

「ううん、今のでは正確じゃない」

先輩が私の目を見つめる。

「一人にはしてくれない。近くにいたときは、いないように振舞っていたくせに、離れるといちいちこちらの挙動を取り上げて意地悪く笑ってくる」

『いつも一人でどこ行ってるんだろ』

『居場所ないんですよ。可愛いそう』

『学校来なきゃいいのに』

真っ黒なシルエットが三日月形に唇を開き、そこだけ真っ赤にして笑っている。

先輩の後ろに見えたその影は、いつの間にか私を嘲るあの子達の顔になっていた。

「私も、です」

それから、言葉は雪崩のようにでてきた。

席が近くの子と最初に仲良くなって、そこを中心にグループができたこと。

だけど、趣味や話題のことでだんだんとその子達と隔たりができてきたこと。

グループの中心の子に意見したら、それ

からはっきりと拒絶されるようになったこと。

他のクラスメートに声をかけても、その子達が静かに圧をかけるので、周りも面倒を嫌がって素っ気ない態度をとること。

「先生は頼りにならないの？」

先輩はそう聞きつつも、私の返事は予想できていたようだった。

「私が一人になったことは分かっているはずです。でも、私が一人であるほうが好きだから、あえてそうしているって話になっていました」

私は思い出す。課題のプリントを提出しに、担任の先生の研究室を訪れたときに聞こえてきた話し声のことを。

『最初は一緒にいたんですけど、本当は一人で静かに過ごすほうが好きみたいなんです』

私が最初に仲良くなった、グループの中心の子の声だった。思わず立ち止まると、その子は、はっきりと私の名前を口にして、それから話を続けた。

『私はそれでもみんなと楽しく過ごそうよ、って言ったんですけど、話題も合わないし、楽しくないって言われちゃって』

『そうか。じゃあ、向こうにも問題はありますか』

その先生の言葉に、身体の温度がひゅつ、と一気に下がった気がした。

『いやいや、問題なんて言ったらかわいそうです。合わないのなんて当たり前じゃないですか。一人ひとり個性があるんだし。だったら無理して一緒にいないほうがいいねって、私達の中で話し合ってた決めたんです』

『それもそうだな。いやー、悪いな。先生が口なんか出して。しっかりとお前達なりに考えて行動しているみたいだな』

話題が合わない、楽しくない。その通りだった。

あの子達の話題に私は乗れなかったし、同意を求められても困ってしまった。

『もうちょっと、楽しい話題にしない？』

話が悪口に傾きがちになったとき、我慢できなくなつてそう言った。

別に自分のことをいい子だとは思ってないし、ほどほどに愚痴る必要性だつてあるとも思う。

でも、その子達の悪口は度が過ぎていたし、愉快なものだとも思えなかった。

なにより、友達だったらそんなときには意見ができる関係でいたかった。

だけど、私のその考えはあの子達の中では敵認定されるものであった。

同意と共感しか、必要なかったのだ。

そんな一連の流れが、あの子の言葉によって、巧みに印象を変えられていた。

グループを離れたのはあくまで私の意思で、周りはそれを尊重した。

それが事実として認識された。

元々、先生は、あの子を気に入っているようだった。

だからこそ、一人になった私ではなく、あ

の子に様子を聞いたのだろう。

「先生は、向こうの味方です。私も期待していません」

私の話が終わると、しばらくの間、二人だけの教室が静寂に包まれた。

先輩が立ち上がり、私の隣へと座る。

「私は、あなたがここに来てくれるのが嬉しい」

その言葉は、綿菓子溶けるように私の内側へと染みわたっていった。

それから、先輩は積極的に自分の話をする

ようになっていった。

孤立させようと悪意をもって動いてくる人達。巻き込まれないよう遠巻きにしているクラスメート達。気が付かず、分かるうともしない大人達。

『私達がこんな目にあうのはおかしい』  
『こんな世界はおかしい』  
『誰も分かってくれない』

『分かってくれるのはあなただけ』

『私の味方はあなただけ』

『あなたの味方も私だけ』

『私はあなたを救いたい』

『あなたも私を救って』

私もそう思った。

この世界で、私のことが救えるのは、先輩一人だけで。

先輩を救えるのは私一人だけなのだ。

「そこで止まって！」

はっ、と顔を上げて歩みを止めると、下から突き上げる風の強さによるめいた。

声のしたほうを振り向くと、真つ青な顔をした女子生徒がこちらを見つめていた。

「お願い、こつちに戻つて来て」

女子生徒は、顔を歪ませて絞り出すような

声でそう言った。

先輩以外の声を久しぶりに聞いた気がした。

「止まっちゃだめ」

隣から聞こえた声は、驚くほど冷たかった。  
「約束したじゃない」

強い力で引つ張られる。その手の温度は、  
極寒の地に置き去りにされた鉄のようだった。

「二人だけの世界にいくつて」

先輩に引きずられるようして歩みを進める。  
迫ってくるのは、屋上のフェンスだった。

「行っちゃだめ！」

出入口にいた女子生徒は、いつの間にか私  
の隣に来ていた。

女子生徒が空いている私の手を両手で握り  
しめる。

凍るようにかたまっていた身体が、彼女に

触れられた場所から解れていくのを感じた。

「気づいて」

女子生徒が私の目を見つめる。

その瞳には、どこかで見たような色が灯っ  
ていた。

「その人、もう死んでるの」

先輩に握られていた手が緩まったのが分か

った。

その手を振りほどき、先輩のほうを見る。

先輩は無表情だった。

どうして気が付かなかったのだろう。

先輩の身体は透き通っていて、向こう側が  
見えていた。

「もう少しだったのに」

全身が粟立つのが分かる。

気が付いたときには先輩の姿はなかった。

へたりこんだ私に、女子生徒は慌てたよう  
にしゃがみこみ、それから私の背を優しく撫  
でた。

女子生徒が買ってくれたあたたかなココア  
を飲んだら、やっと人心地がついた。

「私のこと、覚えてる？」

ベンチに並んでみると、女子生徒がそう  
尋ねてきた。

「図書室にいた子、だよね」

中学の頃、私がよく出入りしていた放課後

の図書室に、いつの間にか来るようになった  
女子生徒。

夕暮れの橙を拒んだ少女は、いつの間にか  
その柔らかな光を瞳に取り込んで、私を見つ  
めていた。

「あのとき、私は誰かの助けを必要としてい  
たの」

女子生徒は話し始める。

自分が家庭での悩みを抱えていたこと。だ  
けど、それを誰に相談していいかも分からな  
かったこと。誰かに気が付いてほしい反面、  
迷惑をかけたくない気持ちもあったこと。

その結果が、毎日読むつもりもない本を広  
げて、図書室でぼんやりとすることになった  
こと。

そんなことをしても誰も気が付くわけない  
のに、と自分を滑稽に思いながらも、心のど  
こかで縋り付くような気持ちを抱えていたこ  
と。

「だから、図書室の先生が声をかけてくれた

とき、本当に驚いた。近くにいた子達だって、私が悩んでいることには気が付かなかったし、あの場所で誰かが私を気にしてくれるなんて、夢にも思わなかったから」

そう言うてから、女子生徒は私に向かって微笑みかけた。

「私に声をかけるよう、あなたが先生に言うてくれたんだよね」

ああ、そうだったつけ、と私は思い出す。彼女とはクラスはちがったけれど、お日様のように明るい声が印象的で、覚えがあった。

だからこそ、意外に思ったのだ。

あたたかな光を受け入れがたいもののように見る彼女の姿を。

「そのおかげで、先生に話を聞いてもらうことができた。全部きれいに解決してわけにはいかなかったけど、それでも本当にずいぶん楽になったの。事情が事情だけに、先生は私が悩みを抱えていたことを、あなたに報告はしない、と言っていたし、私も余計な心配

をかけたくなくて、あなたに何も言わなかった」

そこで、彼女はぐっ、と言葉を詰まらせた。

「それを、すぐ後悔してる」

私の手をぎゅうっと握りしめて、女子生徒は言った。

「あのときはありがとう」

真っ直ぐな感謝の言葉に、日陰からひだまりへと足を踏み入れたような、じんわりとしたあたたかさが身体の内側に広がるのを感じる。

「私、たいしたことしてないよ」

「そんなことない。だって、私は救われた。

本気でそう思ってる。それで、それをあのにきに伝えなかった自分が、今は本当に許せない」

彼女はもう一度強く私の手を握った。

淡いオレンジ色が身体を包むようだった。

「助けを求めるって難しい。そんなこと、私もよく分かっていたのに。あなたはそれを分

かってくれた人だったのに」

彼女の言葉にはっ、とする。

この子も、誰かに助けてほしくて、だけでも言えずに抱えていた。

そして、先輩。

先輩もきつと。

「先輩も、助けを求めていたのかな」

女子生徒もはっ、とした表情をしてから目を伏せて、「きつと、そうだったんだらうね」と小声で言う。

先輩は私のことを「救う」と言った。

蜂蜜のように甘く響く言葉だった。

でも、それは本当の救いにはならない。

二人で世界を閉じることは、救いではなくきつと破滅なのだらうから。

「私、今の状況に向き合う。我慢できないことは伝える」

そう言いながら、先輩、と心の中で呼びかける。

私のこと、許せないかもしれない。

でも、できたら私の姿を見ていてほしい。 がした。

見届けてほしい。

「でも、一人じゃ怖いの」

今度は私から彼女の手を握った。

「私の助けになってほしい」

本当の救いとは、強い意志を伴っているの  
だと思う。

未来に向かう、という意志を。

「もちろん」

そう言った彼女の目からぼろりと涙がこぼ  
れた。

驚く私に、彼女はわっ、と抱き着いてきた。

「生きててくれてよかった」

しゃっくりをあげながらそう言う彼女の頭  
をぎくしゃくした手つきで撫でていると、自  
分達が夕暮れに包まれているのに気が付いた。

日暮れから夜へと近づく、あたたかさと冷  
たさの入り混じった空気が肌を撫でる。

『見てるよ』

その風にまぎれて、そんな声が聞こえた気

(了)